

第 9 章 岩手県大槌町災害復興公営住宅入居者の精神の健康状態

—WHO-5 調査による分析—

(Iwate Prefecture Otsuchi Town Disaster Recovery Public Housing Residents' Mental health status)

岩手大学 麦倉 哲
明治学院大学 浅川達人
早稲田大学 野坂 真

1. 調査の対象と方法

本論文は、2016 年 12 月から 2017 年 1 月末に実施した「大槌町災害公営住宅調査」（18 歳以上の入居者を対象とした質問紙を用いた調査で、全数調査により有効回収数 156 票、回収率は推定で 24%）の結果を分析したものである。大槌町での災害公営住宅の建設計画戸数は 895 戸で、そのうち約半数にあたる（47.3%）419 戸が、調査の時点で完成していた。調査は自記式によるもので、個別面接、留置回収、留置郵送回収を併用して行った。¹⁾

2. WHO-5 とは

WHO-5 とは、精神の健康度を測定する国際標準の調査方法であり、調査回答者は、最近の過去 2 週間の精神状態につき、以下の表に示した 5 つの事項について、5 点から 0 点までの 6 段階で自己評価するものであり、質問への回答結果から、対象者の日常生活における意欲度や生活の質（QOL）を測定するものとなっている。²⁾ 5 項目の合計点の最高は 25 点、最低は 0 点である。調査結果の国際的な評価基準としては、13 点未満（12 点以下）である場合は、精神的な健康状態が低いと評価するものである。本論では、これを「低スコア層」と略記する。

表 1 WHO-5 の 5 項目と 6 段階評価の表

5 つの項目	いつも	ほとん どいつ も	半分以 上の期 間を	半分以 下の期 間を	ほんの たまに	まっ くない
A 明るく、楽しい気分で過ごした。	5	4	3	2	1	0
B 落ち着いた、リラックスした気分で過ごした。	5	4	3	2	1	0
C 意欲的で、活動的に過ごした。	5	4	3	2	1	0
D ぐっすりと休み、気持ちよくめづめた。	5	4	3	2	1	0
E 日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった。	5	4	3	2	1	0

3. 既存の WHO-5 調査における結果

既存の調査では、精神的な健康が侵害されていると予測される対象層について、実施された結果を中

心に表に示した。「若年無業者」や「ホームレス」などで、低スコア層の比率の高さが目を引く。また、東日本大震災との関連では、福島県における原発避難者の比率が比類なき深刻さを示すとともに、岩手県釜石市の高さも注目される。

表 2 既存の WHO-5 調査における結果⁴⁾

被災経験等	対象層 調査実施年	低スコアの比率
原発事故避難	福島県双葉地方の住民 2011	78.8%
貧困	仙台市若年無業者 2011	70.4%
極貧	東京池袋ホームレス 2008-2009	62.5%
東日本被災	釜石市みなし 2013	59.8%
東日本被災	釜石市仮設 2014	58.4%
中越被災	新潟県被災者 2010	47.4%
東日本被災	大槌町仮設 2015	44.9%
惨事ストレス	警察職員 2012	38.7%
東日本被災	大槌町仮設 2016	38.0%
中越被災地	新潟県健康者 2010	36.8%
後期高齢	後期高齢者東京都板橋 2011	26.0%
後期高齢	後期高齢者東京都西多摩 2011	21.9%
後期高齢	後期高齢者兵庫県朝来 2011	21.8%
後期高齢	後期高齢者兵庫県伊丹 2011	17.9%
沖縄戦被災	沖縄戦体験者 2012	4.3%

他方で、沖縄県の戦争体験者の数値は別次元のようである。戦後 70 年を経過した沖縄では、戦争トラウマによる精神疾患が注目を集めている。70 年経っても、精神のダメージを受け続けているという問題である。こうした中で、ここで掲げた調査の対象層は、介護予防事業に参加している快活な高齢者であり社会参加の活動の機会を得ている高齢者であるが、他方で精神的な困難さに向き合ってきた沖縄県の歴

史と文化に係る要因が作用していると、當山富士子は分析している。³⁾

4. 大槌町：仮設住宅段階から公営住宅

2013 年から過去 4 年間、私たちは、大槌町の全戸と山田町の大沢地区ほか一部地区において、今回と同様の WHO-5 の質問紙を用いた調査を実施してきた。その結果、低スコアの比率が「38～45%」の範囲であった。公営住宅調査と同時期に実施した 2016 年大槌町仮設住宅調査の結果もこの範囲に入る。

この比率について、仮設住宅を対象とした既存の各種結果と比較すると、釜石市の仮設住宅（プレハブ仮設）およびみなし仮設住宅のほう深刻とみられる。他方で、東京都や兵庫県で実施された後期高齢者調査の結果をと比べると、被災地における低スコア層の比率は総じて高いことが注目される。被災地における精神的な困難さがうかがえる。

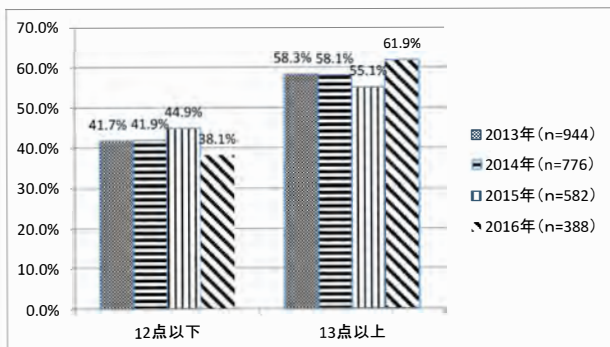


図 1 大槌町仮設住宅調査における WHO-5 のスコア

5. 大槌町公営住宅調査

図 2 は今回の調査結果である。この数値は、きわめて過酷な状況におかれた人々と比べて低いものの、東京都等の高齢者と比べると高いことを示している。また、被災から 6 年目が経過しようとしている調査段階においても、精神的な問題を抱えている層の比率が特段低下していないことを示している。細かくみると、2016 年の仮設住宅調査と比べて、低スコア層の比率が幾分高いという傾向である。公営住宅への入居は、住宅の再建を復興支援政策の柱とする復興のステップでいえば、復興の最終段階であるはずだが、精神の健康にみるかぎりゴールは依然として遠いと言えよう。

性別でみると、男性のほうがりスクの比率が高い。これは過去に実施した仮設住宅の調査と同様であり、2013 年山田町仮設住宅調査結果では、女性の低スコアが 37.1% であるのに対して、男性は 51.9% であった。今回の大槌町公営住宅調査の場合も、男女の差の開きが顕著であった。⁵⁾

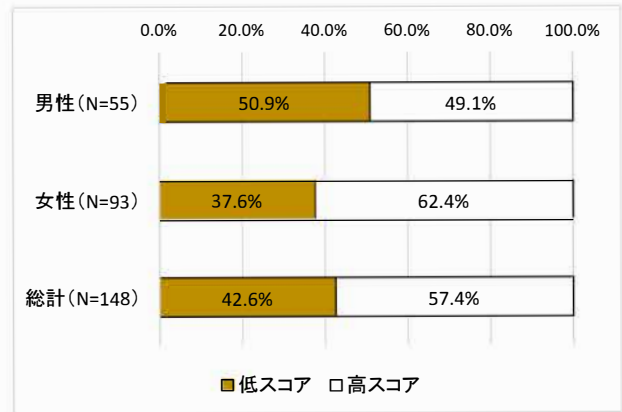


図 2 公営住宅調査：WHO-5 と性別＜N=148＞

6. WHO-5 と他の項目のクロス 基本属性

表 3 WHO-5 と年齢階層＜N=145＞

年齢階層	低スコア	高スコア	実数
20 代	0.0%	100.0%	1
30 代	66.7%	33.3%	3
40 代	75.0%	25.0%	8
50 代	66.7%	33.3%	18
60 代	37.5%	62.5%	32
70 代	31.1%	68.9%	45
80 歳以上	42.1%	57.9%	38
総計	42.8%	57.2%	145

年齢別にみると、30 歳代と、40 歳代と、50 歳代において、低スコアの比率が高くなっている。公営住宅の家賃設定が応能応益の原則が貫かれており、稼働者にとっては家賃が高くなる。このため、実年齢層や子育て年代の稼働層（子育てしていない稼働層を含む）では、生計のゆとりがもてず、精神のゆとりも持てない傾向がみられる。復興公営住宅の家賃政策の転換が求められている。

表 4 世帯 3 類型＜N=150＞

世帯類型	低スコア	高スコア	実数
高齢世帯(65 歳以上のみの世帯)	35.2%	64.8%	88
子ども世帯(12 歳以下を含む世帯)	28.6%	71.4%	7
その他	56.4%	43.6%	55
総計	42.7%	57.3%	150

7. 生活における3つのリスク

(1) リスクの3項目

災害復興公営住宅調査では、生活上の困難性を、生計面、精神面、関係的孤立の面の3つの面から調査した。精神面でのリスクと、生計面でのリスクと、関係面でのリスクである。

生計面のリスクは、被災後の今の暮らしについて、「1:きびしい」「2:きびしくない」「3:その他」の3択で質問し、「1:きびしい」と回答したかどうかをリスクありと識別した。

精神面では、2つの質問のいずれかもしくは両方に該当した場合をリスクと識別している。質問の1つはWHO-5のスコアであり、他方で、被災後の今の気持ちが「1:平穏である」「2:変わらない」「3:かえってきびしくなっている」「4:その他」の4択のうち、「3:かえってきびしくなっている」を選んだ場合をリスクありと識別している。

関係的孤立の面でも、2つの質問のいずれかもしくは両方に概要した場合をリスクと識別している。まず、過去1ヶ月の間に仮設住宅への訪問者があったかどうかで、訪問者がなかった場合をリスクとしている。次に、友人との交流やサークル活動や団地のイベントにおいて社会参加機会がなかった場合を、リスクとしている。質問は、具体的には、以下の通りである。紙面の都合上、実際の調査票のレイアウトとは異なっている。

<質問: 生計面のリスク項目>

問A <被災後の>暮らし向きの変化についていかがですか。(1つだけ選んで○を)

1 被災後きびしい 2 被災後きびしくない 3 その他

<質問: 精神面のリスク項目>

問B WHO-5 (前掲)

問C 被災から6年目の現状について、気持ちの面ではいかがですか。(1つだけ選んで○を)

1 被災から時が経過し、気持ちの面では、平穏になりつつある
2 、、 ほとんど変わらない
3 、、 かえってきびしくなっている
4 その他

<質問: 関係的孤立のリスク項目>

問D この1カ月の間に、尋ねてきた人はいますか。(あてはまるものすべてに○を)

a 尋ねてきた人はいない b 家族・親族
c 知人・友人 d 役所の事務的な訪問
e 心身面の相談員 f 生活面の相談員
g ボランティアの人 h 震災前の地区の人
i 避難所で親しくした人 j 仮設住宅で親しくした人
k 今の地域で親しい人 l その他

問E あなたは現在、次のような活動をしていますか。(あてはまるものすべてに○を)

a とくにな
b 友達と会う、連絡をとる
c サークル活動・勉強会などに参加
d 団地や周辺町内会でのイベントなどに参加
e 町の復興協議会・まちづくり懇談会などに参加
f その他

表5 3つのリスクと調査項目

3つのリスク	調査項目
生計面	暮らし向きの自己評価
精神面	WHO-5 心の平穏の自己評価
関係的孤立	訪問者の有無 交流活動の有無

3つのリスクにおける調査項目は、表5の通りである。精神面リスクにおいては、2つの調査項目を配しているが、図3に見るように、「WHO-5」と「心の平穏」の両項目の関連性は高い。以下、3者の相互の関連性をみえる。

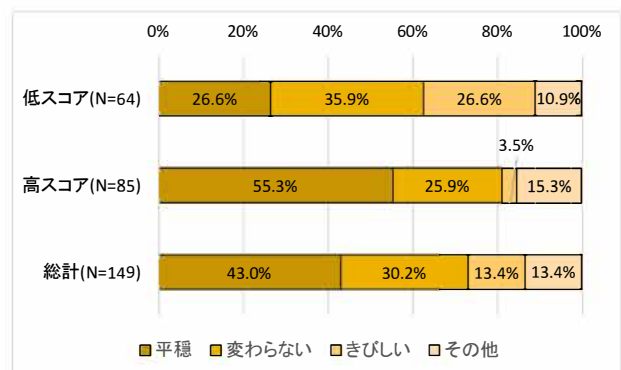


図3 WHO-5 スコアと「心の平穏の自己評価」<N=149>

(2) 暮らし向き: 生計面での困窮

WHO-5 のスコアと「暮らし向き」との関連性をみ

てみると、低スコアの75%が「暮らし向き」において「きびしい」と回答しており、精神面でのリスク層は生活面での困難と関連性が高いことがわかる。

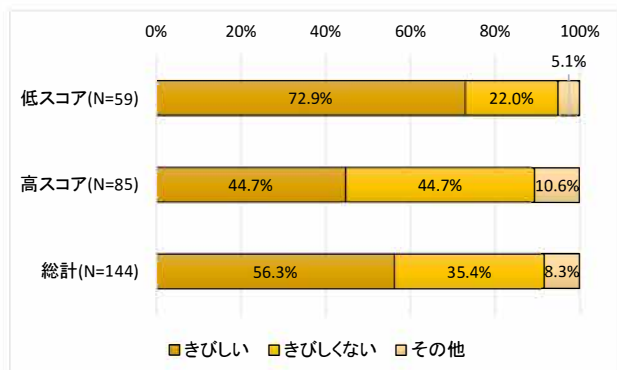


図4 WHO-5 スコアと「暮らし向き」＜N=144＞

(3) 関係的孤立

関係的孤立のリスク項目との関連性をみてみると、WHO-5 の低スコア層において、公営住宅への「訪問者なし」の比率が相対的に高いことがわかる。

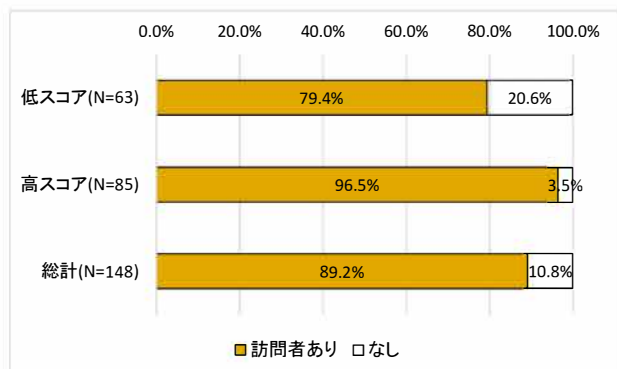


図5 WHO-5 スコアと「公営住宅への訪問者」＜N=1148＞

また、関係的孤立に関するもう一つの調査項目である「交流活動」の有無についても、WHO-5 低スコア層において、交流活動なしの比率が顕著に高いことがわかる。

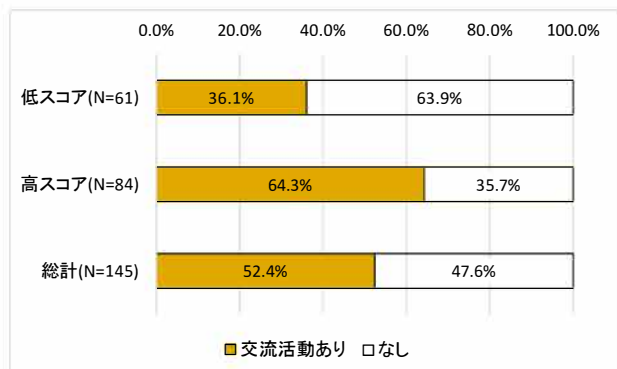


図6 WHO-5 スコアと「交流活動」＜N=145＞

(4) 多重性

かくしてこの3つのリスクが重なり合っている様子がうかがえる。多重のリスクをかかえると、生活はより一層困難であることがわかる。リスク項目が3つのうち2つ以上重なっている多重リスクは48.9%とほぼ5割であり、3重リスクは20.9%と2割を超えている。今回の公営住宅調査では、過去の仮設住宅調査と同様の傾向がみられる。同様の分析を、2016年実施の大槌町仮設住宅入居者調査で実施したところ、より一層深刻な面もうかがえる。

表6 3つのリスクの多重性（2016 公営住宅調査）

リスク類型:実数		生計	精神	関係	小計
S リスク		21	5	15	41
多重リスク	W リスク	39			68
	T リスク	29			
N リスク		30			30
リスク類型:比率		生計	精神	関係	小計
S リスク		15.1%	3.6%	10.8%	29.5%
多重リスク	W リスク	28.1%			48.9%
	T リスク	20.9%			
N リスク		21.6%			21.6%

表7 3つのリスクの多重性（2016 仮設住宅調査）

リスクの多重性		生計	精神	孤立	小計
S リスク		15.0%	2.3%	9.8%	27.1%
多重	W リスク	29.3%			50.4%
リスク	T リスク	21.1%			
NO リスク		22.6%			22.6%

8. 低スコア層の生活実態

(1) 幸せと感じる時

調査では、どのような時に幸せとを感じるか質問した。質問の内容は、以下の通りである。

＜質問：幸せとを感じる時＞

問F あなたは現在、次のような活動をしていますか。

(あてはまるものすべてに○を)

- a とくにない b 友達と会う、連絡をとる
- c サークル活動・勉強会などに参加
- d 団地や周辺町内会でのイベントなどに参加
- e 町の復興協議会・まちづくり懇談会などに参加
- f その他

WHO-5 の低スコア層は、幸せ・楽しいと感じる時に、「友人・知人と会っている時」が挙げられる比率が少ない。また同じ質問で、「家庭での団らん」が挙げられる比率も少ない。これは関係的孤立とも関係する事柄でもあり、他者との関係の中で充実した生活が遅れていないことが、WHO-5 のスコアを低くしている要因を形成している。

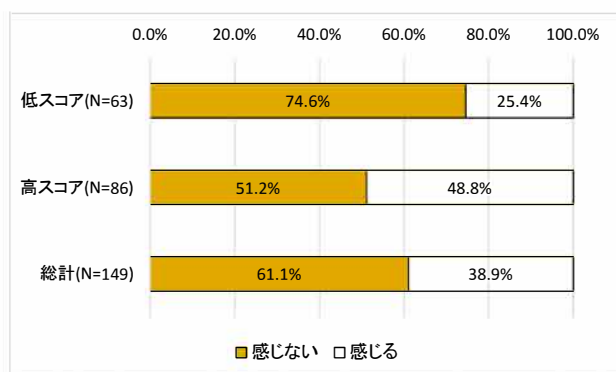


図 7 WHO-5 スコアと「幸せ・楽しいと感じる時：友人・知人と会っている時」＜N=149＞

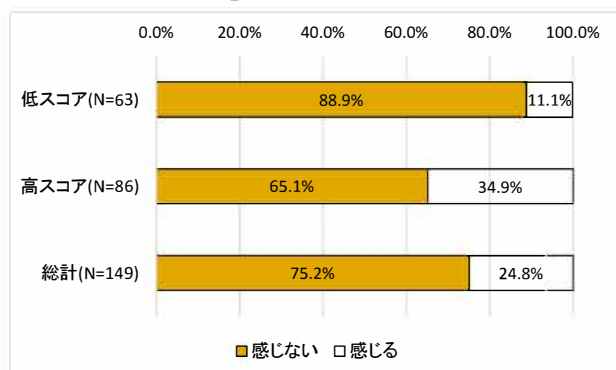


図8 WHO-5 スコアと「幸せ・楽しいと感じる時：家庭の団らん」＜N=149＞

(2) 交流活動

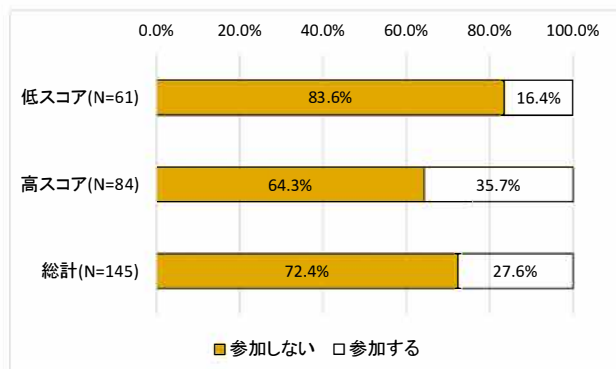


図9 WHO スコアと「交流活動：団地・町内会のイベントに参加」＜N=145＞

先に示した問 E の質問のうち、「d 団地や周辺町内会でのイベントなどに参加」の有無に着目すると、WHO-5 の低スコア層では、「団地・町内会のイベントに参加」する割合が低く、また、低スコア層では「b 友達と会う、連絡をとる」割合も少ない。社会参加機会の少なさが、WHO-5 のスコアの低さと関係していると思われる。

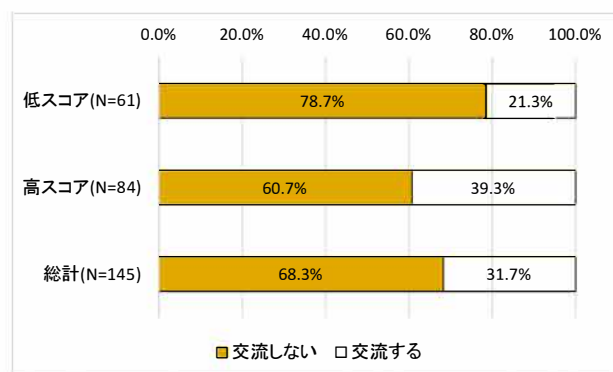


図 10 WHO スコアと「交流活動：友達と会う・連絡をとる」＜N=136＞

(3) 復興度

調査では、復興度について、自分自身の復興度と町の復興度の 2 つの次元の復興度に関する評価を求めている。

＜質問 G 自分自身の復興度、町の復興度＞

問 あなた自身の復興については、あなたはどの程度復興しているとお考えですか。

問 町の復興については、あなたはどの程度復興しているとお考えですか。

- | | | |
|------------|------------|------------|
| 1 0～20%未満 | 2 20～40%未満 | 3 40～60%未満 |
| 4 60～80%未満 | 5 80～100% | 6 その他 |

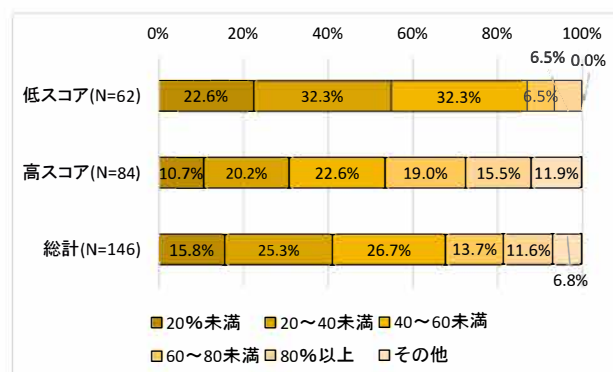


図 11 WHO スコアと「自分の復興度」＜N=146＞

WHO-5 の低スコア層は、自分自身の復興度が低いと自己評価している。町の復興度に対する評価では、高スコア層と低スコア層で差はない。しかしながら、自分自身の復興となると、低スコア層は、自身の復興度が低いと自認する。他者と比べて低い程度にしか復興していない状況に置かれていると思われるとともに、現状について肯定的に認識できない状況に置かれていると思われる。

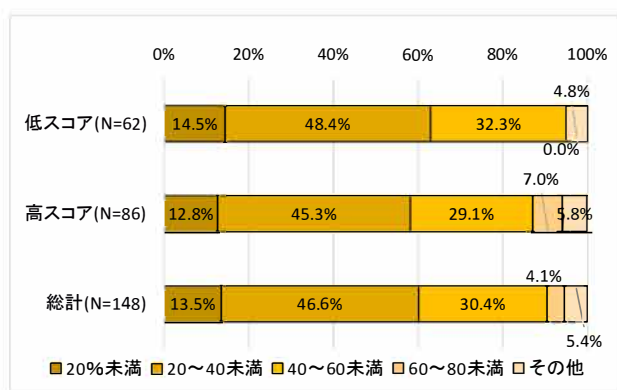


図 12 WHO スコアと「町の復興度」＜N=148＞

(4) 大槌町への愛着

大槌町への愛着について、質問している。

＜質問 大槌町への愛着＞

問 H 大槌町への愛着は強いほうですか、弱いほうですか。

1 強い 2 やや強い 3 やや弱い 4 弱い

かくして、WHO-5 の低スコア層は、大槌町への愛着に置いて、「やや弱い」と「弱い」とを合わせた比率が 45.6%と、半数近くに及ぶ。生活諸条件の総合的な評価が町への愛着に示されるという側面もあることから、町への愛着の比率を高めるためには、WHO-5 のスコアを高めていく対策が必要である。

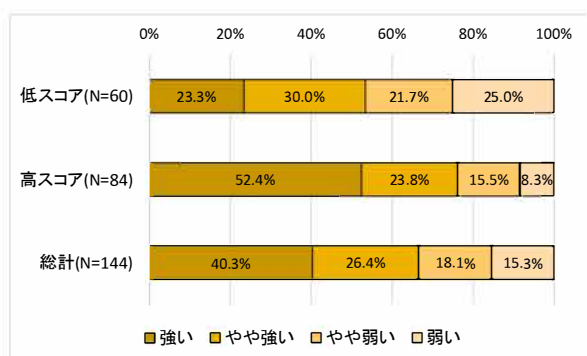


図 13 WHO スコアと「大槌町への愛着」＜N=144＞

9. 提言

(1) 支援策の充実

実施してほしい支援策との関連をみると、WHO-5 の低スコア層は、復興支援政策の充実を求めている。支援策が十分でないことが、精神の不安に影響している。

＜質問 実施してほしい支援策＞

問 I あなたの暮らしのために、以下に掲げた

支援策の中で、実施してほしいものを選んでください。

(あてはまるものすべてに○を)

- a 生活再建支援金を増やしてほしい
- b 医療費・介護にかかわる経費・負担を軽減してほしい
- c 就学・育児にかかる費用を援助してほしい
- d 一家を養える給料がほしい
- e 安定した仕事を紹介してほしい
- f 週に2, 3日程度働ける仕事を紹介してほしい
- g 高齢者でも障がいがあっても働ける仕事を紹介してほしい
- h 心おだやかに暮らせる環境づくり i その他

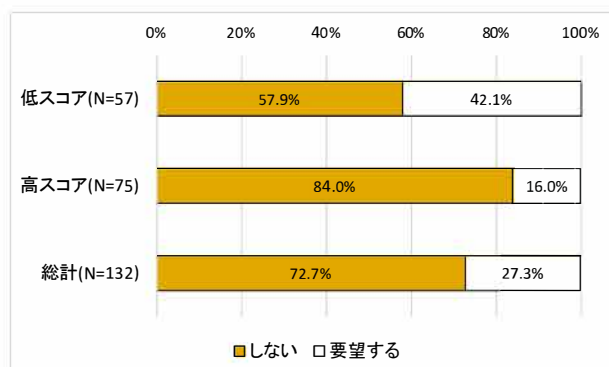


図 14 WHO スコアと「支援策要望:生活再建支援金を増やしてほしい」＜N=123＞

(2) すべてのリスク発見・対応の機会の創出

WHO-5 の低スコア層への支援ニーズを発見することが、対応のきっかけとなる。このためには、低スコア層にとって他者と接触する機会を可能な限り増やすことが重要である。そこで、質問 D の公営住宅への訪問の質問から「c 知人・友人」「e 心身面の相談員」「f 生活面の相談員との関連を考察する。

低スコア層では、先にみたように住宅への訪問者が相対的に少なく、また、知人や友人の訪問機会も少なく、心身面での相談員が訪問する機会も、高スコア層よりも低いことがわかる。また、ボランティアの訪問機会も低くなっている。その一方で、生活

面での相談員の訪問機会は、相対的にいくぶん高いという結果である。ケースワーカーや支援員によるピンポイントの訪問は、一定の有効性を発揮する可能性がある。専門的な支援員による訪問活動の充実が、すべての精神的な支援策の窓口になるのである。

ところが、被災地の現状は、訪問活動をする支援員を減らす傾向にある。有償の活動を継続するための予算を逡巡させていくことが、被災者や被災地域社会に求められるのが現状である。いつまでも、支援に頼らないことが、ある種の道徳の押し付けのように求められている。エビデンスに基づかない自立論は、災害の実態への理解の風化そのものである。

自立をうながすための支援人員の削減によっては、被災者の精神的な困難性は改善されることは望めない。今回の WHO-5 調査で明らかになったのは、精神的な困難を抱えているリスク層は、他の困難も重ねて背負っていることが多く、社会的に孤立しがちであるということである。被災地の仮設住宅の実態や、公営住宅の実態を、継続的に明らかにする調査そのものも、実施する予算の制約によって困難になっている。

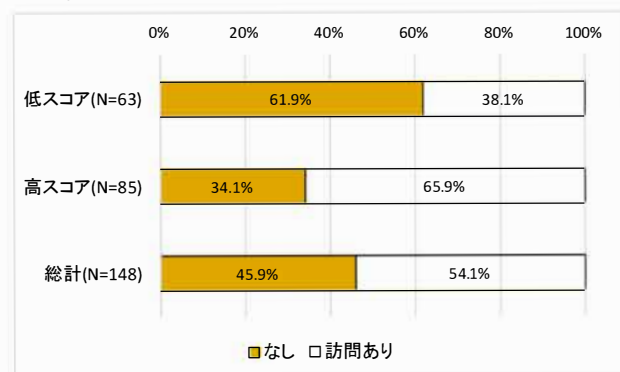


図 15 WHO スコアと「住宅への訪問:友人・知人」<N=138>

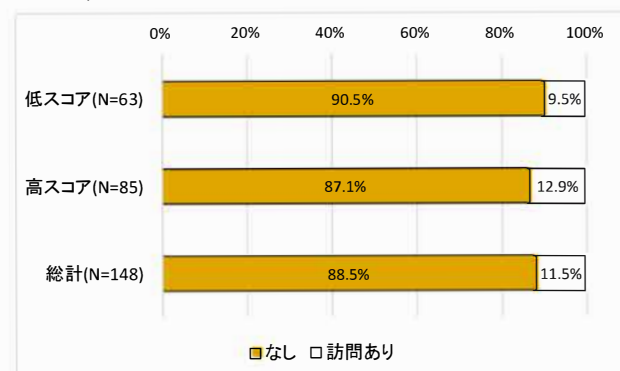


図 16 WHO スコアと「住宅への訪問:心身面の相談員」<N=148>

こうした中で、7年間の仮設住宅調査の上に、公営住宅調査を継続した意義はあると思われる。精神的な困難層が、他者につながる契機は、ボランティアによる継続的な訪問や、市民団体による傾聴訪問活動である。しかしながら、本調査では、公営住宅住民へのボランティアによる訪問活動は、乏しいものとなっている。これには、復興政策の陥穽が横たわっている。避難所から仮設住宅、仮設住宅から災害公営住宅へと、たびたびのコミュニティの再編により、安定した地域社会での絆の形成が困難になっている。また、支援を継続したい市民団体によって、公営住宅となると、どの人がどこへ行ったのか、わからなくなってしまう。復興政策により、住のステップアップシステムが、市民や各種支援者による関係的支援の継続においても、大きな障害となっている。精神的な困難層の支援ニーズの発見のためには、支援を志向する他者と出会う機会の充実が求められているが、住のステップアップ型の復興政策は、こうした絆が形成される機会をも制約しているのである。

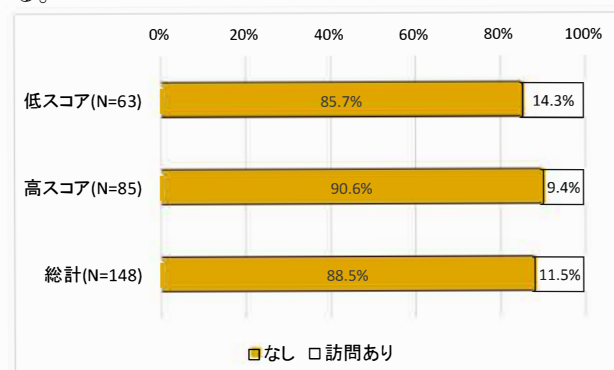


図 17 WHO スコアと「住宅への訪問:生活面の相談員」<N=138>。

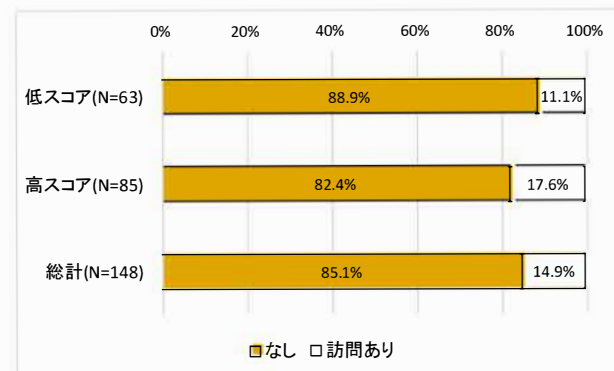


図 18 WHO スコアと「住宅への訪問:ボランティア」<N=138>

多様なニーズの発見のための訪問機会を多様化するとともに、生活面の支援が必要な対象層には、生活面に限定せず、必要に応じて精神面での支援と結びつける必要があることが、調査結果から示されている。個人情報の安全な管理という責務を果たしつつ、ボランティア活動と公的なソーシャルワークとの連携がますます図られることが期待されている。

（３）ポジティブな面を発見

WHO-5 の低スコア層は、活動の面や評価の面でネガティブなスコアと連動することが多い。低スコア層は、ほぼ全面的に消極的で、ネガティブである。

しかしながら、すべての項目との関連性を検討した結果、発見したことがある。調査では、自分たちで取り組む復興のまちづくりについて質問した。

＜質問 自分たちでとりくむ復興のまちづくり＞
問 J 震災復興のまちづくりについて、住民・事業者として、どのようなことにかかわっていきたいですか。（あてはまるものをすべてに○を）

- | | |
|---------------------|-------|
| a 地域における交流の活性化 | f その他 |
| b まつり・伝統行事など地域文化の復興 | |
| c 自然環境・生物生態系の保全 | |
| d 犠牲となった方がたの鎮魂・慰霊 | |
| e 防災の文化を受け継ぐ | |

この中の「犠牲者への鎮魂・慰霊」と「防災文化を受け継ぐ」の項目において、低スコア層の関心度が相対的に高いという面がみられた。

このことから、「犠牲者への鎮魂・慰霊」「防災文化を受け継ぐ」まちづくりを推進することが、重要であるかもしれないと考えた。被災経験者の WHO-5 のスコアを高めることにもつながるかもしれないのである。

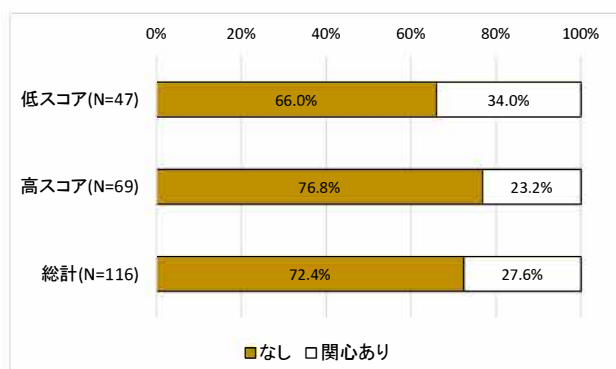


図 19 WHO スコアと「自分たちで取り組む復興のまちづくり: 犠牲者への鎮魂・慰霊」＜N=107＞

沖縄県の介護予防事業参加に参加している加高齢者における低スコア者の比率が低いことの要因として、沖縄県における歴史と文化が影響していると指摘されていることを踏まえて付論すれば、戦争体験を語り継ぐ機会が、日常生活世界の中にある程度浸透していることによる効果もあるのではないかと推測する。東日本大震災被災者の精神面の課題に取り組むうえで、被災経験を、安心して語り合い、語り継ぐ機会が継続して開かれることも、WHO-5 の数値を改善するために重要な一つの要素ではないかと思われる。

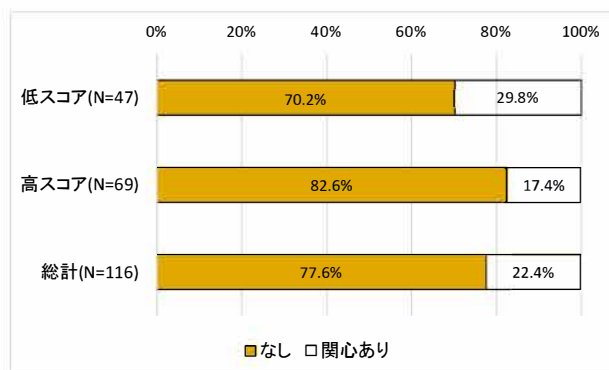


図 20 WHO スコアと「自分たちで取り組む復興のまちづくり: 防災文化を受け継ぐ」＜N=107＞

かくして、WHO-5 のスコアを改善する対策として、精神面でのリスクは、医療や福祉などの専門的なケアや対処が求められる一方で、日常生活の中で、安心できる居場所や安心して話せる相手の存在なども必要とされるので、リスク層の日常生活のなかに、安心できる環境をいかにして実現できるかということと、専門的なサービスにつなぐ回路の充実が求められる。

生きがい追求の現状では、社会活動を活性化させる支援ニーズがあると思われる。このような活性化をどのように実現していくかが、コミュニティの課題でもあり、同時に、コミュニティをこえた交流の活性化も期待される。被災調査で比較的さかんに実施されている運動系やアミューズメント系の社会参加活動のみならず、学習系や創作系の社会参加活動のニーズもあると思われる。

関係や交流の活性化の方法として、グループ活動によるもののほか、個別の面談や傾聴などのケース活動の充実が図られる必要がある。また、沖縄県の戦争体験者の WHO-5 スコアから、苦難の経験を語り継ぐ活動にも大きな意義があることが再確認できる。

今後の展望として、精神的な受傷について、それを乗り越える力としてレジリエンス概念が注目を集

めているが、精神面の受傷について、被災経験と向き合うことを支えつつ、その経験を語り継ぐ文化がある程度形成されている沖縄文化の特性と東北被災地で再構築されつつある精神文化を比較する研究を進めていく必要があると思われる。

注

- 1) 麦倉哲・浅川達人・野坂真『2016年度 調査報告書(最終版)大槌町災害復興公営住宅入居者調査』(明治学院大学社会学部浅川達人研究室・岩手大学教育学部社会学研究室、2017) 参照。
- 2) WHO-5 調査票については、Psychiatric Research Unit「WHO-5 精神的健康状態表(1998 年版)」(WHO Collaborating Centre in Mental Health)を用いた。
- 3) 当山富士子「終戦から 67 年目にみる沖縄戦体験者の精神保健 介護予防事業への参加者を対象として」『沖縄県立看護短期大学紀要』第 14 号(2013)を参照。
- 4) 「福島県双葉地域住民、2011」は、福島大学災害復興研究所『双葉地方の住民を対象とした災害復興実態調査基本報告書』(2013)を参照。「仙台市若年無業者 2011」は、安保英勇「若者無業者の心理的諸特性—就業への意欲とキャリアレディネス・精神健康」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第 60 集第 1 号(2011)を参照。「東京池袋ホームレス 2008-2009」は、森川すいめい「東京都一地区におけるホームレスの精神有病率」『公衆衛生雑誌』第 58 巻第 5 号(2011)を参照。「釜石市みなし 2013」及び「釜石市仮設 2014」は、佐藤岩男・平山洋介編『釜石市民の暮らしと復興についての意識調査(第 3 回)基本報告書』(2014)を参照。「新潟県被災者 2010」及び「新潟県健常者 2010」は、橘輝ほか『震災後の大人の健康事業報告書』新潟県精神保健福祉協会心のケアセンター(2013)を参照。「大槌町仮設 2015」及び「大槌町仮設 2016」は、岩手大学教育学部社会学研究室・岩手大学三陸復興・地域創生推進機構「大槌町仮設住宅入居者調査 2016 年度調査結果報告書論点集」(2017)を参照。「警察職員」は、大澤智子ほか「警察職員の業務に関連するストレスとその健康への影響、兵庫県こころのケアセンター「短期研究 4」(2012)を参照。「後期高齢者東京都板橋 2011」「後期高齢者東京都西多摩 2011」「後期高齢者兵庫県朝来 2011」及び「後期高齢者兵庫県伊丹 2011」は、稲垣宏樹ほか「後期高齢者及び超高齢者におけ

る精神的健康の地域差の検討 —SONIC study80 歳、90 歳調査における WHO-5-J の結果から」『日本心理学会第 78 回大会プログラム』(2014) 参照。「沖縄戦体験者 2012」は、当山富士子(2013) 前掲。

5) 麦倉哲ほか『岩手大学調査報告会 山田町仮設住宅住民の復興の現状と支援課題について —山田町大沢地区仮設住宅調査の結果から』岩手大学教育学部社会学研究室(2014) 参照。

表 2 既存の WHO-5 調査における結果²⁾

参考文献

- 1) 安保英勇、2011(前掲)
- 2) 稲垣宏樹ほか、2014(前掲)
- 3) 大澤智子ほか、2012(前掲)
- 4) Psychiatric Research Unit「WHO-5 精神的健康状態表(1998 年版)」WHO Collaborating Centre in Mental Health
- 5) 佐藤岩男・平山洋介編、2014(前掲)
- 6) 橘輝ほか、2013(前掲)
- 7) 当山富士子、2013(前掲)
- 8) 福島大学災害復興研究所、2013(前掲)
- 9) 麦倉哲・浅川達人・野坂真『2016年度 調査報告書(最終版)大槌町災害復興公営住宅入居者調査』、明治学院大学社会学部浅川達人研究室・岩手大学教育学部社会学研究室、2017
- 10) 麦倉哲、高松洋子、梶原昌五「東日本大震災被災状況からみた社会の脆弱性とその克服課題—リスク層への支援と脆弱性の克服」岩手大学教育学部附属実践総合センター『岩手大学教育学部附属実践総合センター研究紀要』第 15 号、37-44 頁、2016
- 11) 麦倉哲、高松洋子、梶原昌五「被災リスク層の多層化と復興支援課題—岩手県大槌町仮設住宅調査より—」日本都市学会『日本都市学会年報』VOL. 49、233-242 頁、2016
- 12) 森川すいめい、2011(前掲)